成果報告書

［協働研究事業名］
国際交流版「Animal SDGs」対話の場づくり
多言語通訳ツールを活用した双方向コミュニケーションモデルの研究

Ver 1

提出日
2023.2.24

［協働研究事業団体名］
株式会社ヌールエ デザイン総合研究所

目次

［１］協働研究事業の概要・目的　3

［２］申請団体のプロフィール　4

［３］協働研究事業の参加団体プロフィール　5

［４］協働研究事業の期間　6

［５］協働研究事業の背景　7

［６］協働研究事業の詳細　8

［７］実験結果と考察　20

［８］今後の計画　24

［９］ご提案　25

［10］参考資料　26

［１］協働研究事業の概要・目的

日本（三鷹）と海外の**若者たちが、国際交流版「Animal SDGs」を実施する**にあたり、
①言葉の壁を**多言語通訳ツールを活用する**ことで、
②限られた時間の中で**対話の機会を増やし、**
③より楽しく、気づきの多い**場を創出すること**
が本研究事業の目的である。

申請時の協働研究事業の「概要・目的」
（背景） まちづくり研究員１期生として、研究レポート『クリエイティブ人材を育む「動物かんきょう会議」メソッドの実証研究 - Animal SDGs（動物が語る SDGs）三鷹モデルの開発と三鷹市での実践』（三鷹まちづくり研究 第 2 号　264 頁～293 頁　2022 年 10 月発行：三鷹ネットワーク大学）が完成した。本研究テーマは、わが国の次世代を担う若者・子どもが、諸外国に比べて自己肯定感が低く依存型の傾向にあり、その根本的な原因は、他国に比べて「社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論する」機会が非常に少なく、対話のベースとなる「自分軸」が育たない状況のまま大人になっていく社会環境にあると指摘した。解決策として、「教える」だけではなく「気づく」を促す対話型メソッド「Animal SDGs」プログラムの実施を提案し、考察した。 「Animal SDGs」は、動物（視点）で多角的に対話することをとおして、高い視点で発想し、未来をデザインすることを促すものである。2021 年度は、民学産公協働研究事業として AnimalSDGs の 13 番「気候変動対策」に取り組み、東京農工大学（朝岡幸彦教授）の協力のもとプログラム『南米アマゾンの森と家畜』を開発した。そして三鷹市内外の市民・子どもたちが参加する「第 1 回三鷹！動物かんきょう会議」を実施した。 （本研究の内容と目的） 本協働研究のテーマは、日本（三鷹）と海外の若者たちが国際交流版「Animal SDGs」を実施するにあたり、言葉の壁を多言語通訳ツールを活用することで、限られた時間の中での対話で発言の機会を増やし、より楽しく、気づきの多いものとしていくための研究である。 ①亜細亜大学（岡村ゼミ）協力のもと多言語通訳ツール「スマリンガル」を導入する ②インストラクター養成講座を提供し、学生に「対話型メソッド」ノウハウを伝える ③学生がファシリテーター役となって、「Animal SDGs」プログラムを実施する ④同じストーリーを共有する若者たちによるリモート世界会議を計画する ⑤多言語通訳ツールを活用し、若者・子どもが創発する国際交流イベントを実施する

［２］申請団体のプロフィール

株式会社ヌールエ　デザイン総合研究所
［主な事業内容］ ①デザイン業 ②IT 業 ③教育サービス業
［会社案内］ ヌールエは 1995 年に創設され、1997 年、地球温暖化防止京都会議（COP3）をきっかけに作品「動物かんきょう会議」は誕生しました。本作品を世界事業へとプロデュースしていく情熱が、クリエイティビティ、そしてデザイン力を鍛え、多彩なリソースのネットワークを構築しました。 コンセプトデザイン、グラフィック、印刷物、ウェブ、映像、音楽、コミュニケーションシステム開発。さらに、イベントの実施、教育メソッド開発など、すべて長期にわたるコンテンツストーリーの中で一貫して実行しています。ゼロから発案し、コンセプトを磨き上げ、プロデュースしつづけること。そして多ジャンルの 100％オリジナルプロジェクトでの成功・失敗経験が我が社の資産であり、圧倒的なユニークさを実現していいます。
【担当者：イアン 筒井（いあん つつい）】 1997 年からはじめた「動物かんきょう会議プロジェクト」の原作者＆総合プロデューサー。動物（目線）になって考えることで既成概念の枠をはずし、自由でクリエイティブな発想ができる人材を育成したいと考えている。目下、動物園と水族館、国立・国定公園をフィールドに、日本と世界の子どもたちが創発しあう「せかい！動物かんきょう会議」を展開している。2022 年、コンセプトブック「Animal SDGs／動物が語る SDGs」を発行した。 株式会社ヌールエ デザイン総合研究所　代表取締役 https://nurue.com

［３］協働研究事業参加団体のプロフィール

	団体名	主な役割
1	亜細亜大学都市創造学部 （岡村久和ゼミ）	・国際会議の企画づくり、対話の場づくり ・Animal SDGs インストラクターによるテーマづくり ・AI 自動通訳システム会議活用シナリオ、技術サポート
2	こども SDGs 実行委員会 （木村美枝子）	・Animal SDGs 認定インストラクターによる、亜細亜大学の学生への研修プログラム（ベーシック）の実施 ・日本型ファシリテーションのノウハウ提供
3	こども SDGs 実行委員会 （柿沼瑞穂）	・NGO との国際交流事業の中での実証実験機会づくり ・インドネシアの若者との交流シナリオ ・モンゴルとの子どもたちとの交流シナリオ
4	公益財団法人 OISCA （諸江葉月）	・国際交流事業（海外コーディネーターとの連携調整） ・インドネシア　現地コーディネーター協力要請 ・モンゴル　現地コーディネーター協力要請
5	スマートカルチャーゲートウェイ株式会社 （勝川宏明　高岡幹）	・AI 自動通訳システム「スマリンガル」の技術提供 ・実証実験でのシステム構成の提案、技術サポート
6	合同会社げんてん （Marcel RASINGER）	・地球サミットでの進行サポート

［４］協働研究事業の期間

2022 年 7 月～2023 年 2 月

①7 月～9 月：準備
（１）亜細亜大学の学生を対象に「Animal SDGs」の講義を実施
（２）亜細亜大学の学生を対象にインストラクター養成講座を実施

②10～11 月：地球サミットの計画と実施
（１）学生が中心となり、オーストラリアの大学生との国際交流を計画
（２）基調講演で「Animal SDGs の着眼」を伝える
（３）国際交流を AI 自動通訳システムをつかって実施する

③1 月～2 月：「地球サミット」の検証と「子ども地球会議」での実施
（１）子ども SDGs 実行委員会、OISCA の担当者と計画づくり
（２）インドネシア x 日本（高校生）の地球会議での検証
（３）モンゴル x 日本（小学生）の地球会議での検証

④2 月：報告書
・上記①～③の活動成果をもとに報告書を作成

［５］協働研究事業の背景

（社会的背景）
世界：
・気候変動、コロナパンデミック、ウクライナ戦争と悪化をたどる世界情勢の中で明るい未来を描きにくい状況
・SDGs への取り組みは、日本国内だけでなく世界との関係性の中で考えていく必要がある

教育現場：
・教育現場では一人１台タブレット（PC）が普及している
・コロナ禍で、ZOOM を使用したオンライン会議が普及している
・地域の特色を活かした「コンテクスチャルエデュケーション」が進んでいる

若者たち：
・コロナ禍で、学校での交流、留学等が停滞し、コミュニケーションをする機会を失っている
・若者たちは「自分の考えをもてにくい」ことに悩み、「自分の考えを持ちたい」と考えている
・Animal SDGs ヴィジョンへの共感がある

（技術的背景）
技術：
・AI 技術の進歩により、日本語から多言語への同時通訳（翻訳）の精度が高くなっている
・AI 同時通訳で、これまでの現地通訳者による現地語通訳時間、人的リソースを軽減できる可能性がある
・AI 同時通訳システムが実際の現場で運用できるか。検証の機会が必要

［６］協働研究事業の詳細

【事業目的】
日本（三鷹）と海外の若者たちが国際交流版「Animal SDGs」を実施するにあたり、
①言葉の壁を「多言語通訳ツールを活用する」ことで、
②限られた時間の中での「対話の機会」を増やし、
③より楽しく、気づきの多い「場を創出する」こと

【実証実験に当たっての２つの仮説】
（若者たちの成長）
若者たちは、Animal SDGs をプロデュースすることで「自己肯定感」が高くなる

（プロジェクトの進化）
１：若者たちが、自らの関心をもとに「Animal SDGs」視点の国際会議を実現する
２：世界の子どもたち同士が、AI 自動通訳を使って交流できる
３：国際交流版「Animal SDGs」対話の場づくりのパッケージが完成する

---

①7 月～9 月：準備
（ｉ）亜細亜大学の学生を対象に「Animal SDGs」の講義を実施
（ii）亜細亜大学の学生を対象にインストラクター養成講座を実施

（ｉ）筒井が亜細亜大学の学生を対象に「Animal SDGs」の講義を実施
本講義の特徴は

【起】①AI 時代に必要な３つの力
クリエイティブであること（主体的に考え、自発的に行動できる）
自己肯定感が高いこと
自分と他者との関係性に気づくこと

【承】②デザイン思考
これまで「目先の課題解決型」の近視眼的思考パターンの繰り返しが状況を悪化させてきた。この失敗を繰り返さないために SDGs では「デザイン思考」が大切だと言われている

【転】③多角的な視点で発想。人間会議⍰動物会議
自分の考えをクッキリされるためには対話が必要
対話を促す、コンセプトブック「Animal SDGs」を紹介

【結】④持続可能な未来をデザインする

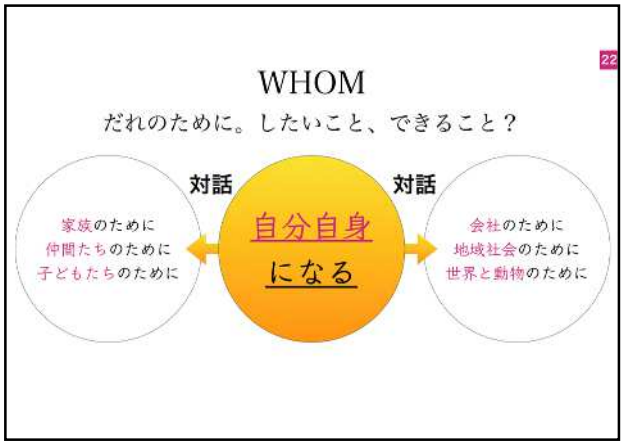
人間だけに与えられた「地球環境を変える力」を発揮して、持続可能な社会・経済の仕組みをデザイン（計画）するワークショップ

講義を受けた学生たちが自分ごととしての関心は……

「わたしは他人の考えに迎合してしまう。なぜ、自分の考えをもてないのか？」
「自己肯定感が低い」
「自分の考えを持って、発言できるようになりたい」ということであった。

若者たちは「自分の考えをもてるようになる」ことを目的に、「Animal SDGs」をテーマとした対話の場づくり、オーストラリアの大学生と交流する「地球サミット」の企画づくりをはじめた。

（講義資料より抜粋　5 月 16 日）



（ⅱ）亜細亜大学の学生（２名）を対象にインストラクター養成講座を実施

「地球サミット」企画のリーダーの若者２名が、インストラクター養成講座を受講する。認定インストラクターの木村美枝子が「Animal SDGs」の対話型アクティビティを実施し、自己肯定感を高めるメソッドを伝える。若者は体験を持ち帰り、ゼミ生と共有していく。

（インストラクター研修２日間より　9 月 22 日・23 日）

②10～11 月：地球サミットの計画と実施

（ｉ）学生が中心となり、オーストラリアの大学生との国際交流を計画

（ii）基調講演で「Animal SDGs の着眼」を伝える

（iii）国際交流を AI 自動通訳システムをつかって実施する

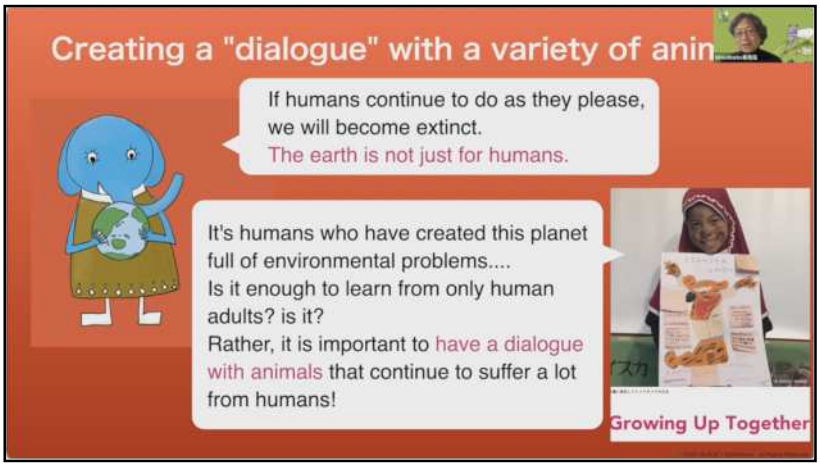
（ｉ）学生が中心となり、オーストラリアの大学生との国際交流を計画

「THE EARTH SUMMIT」

2022 年 11 月 26 日（土）10 時 30 分～15 時

会場：日本（亜細亜大学）　オーストラリア（現地）

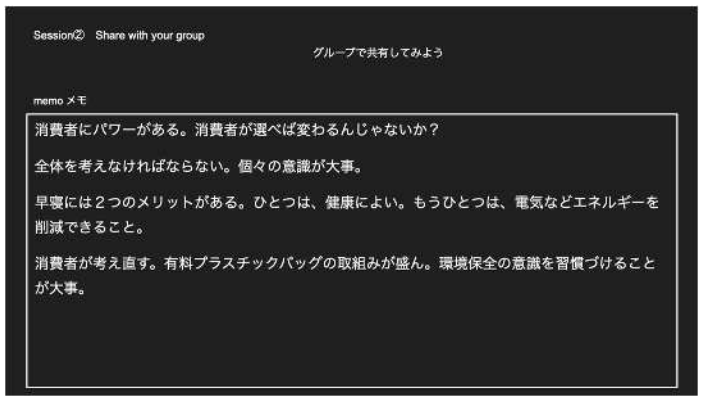
（ⅱ）基調講演で「Animal SDGs の着眼」を伝える

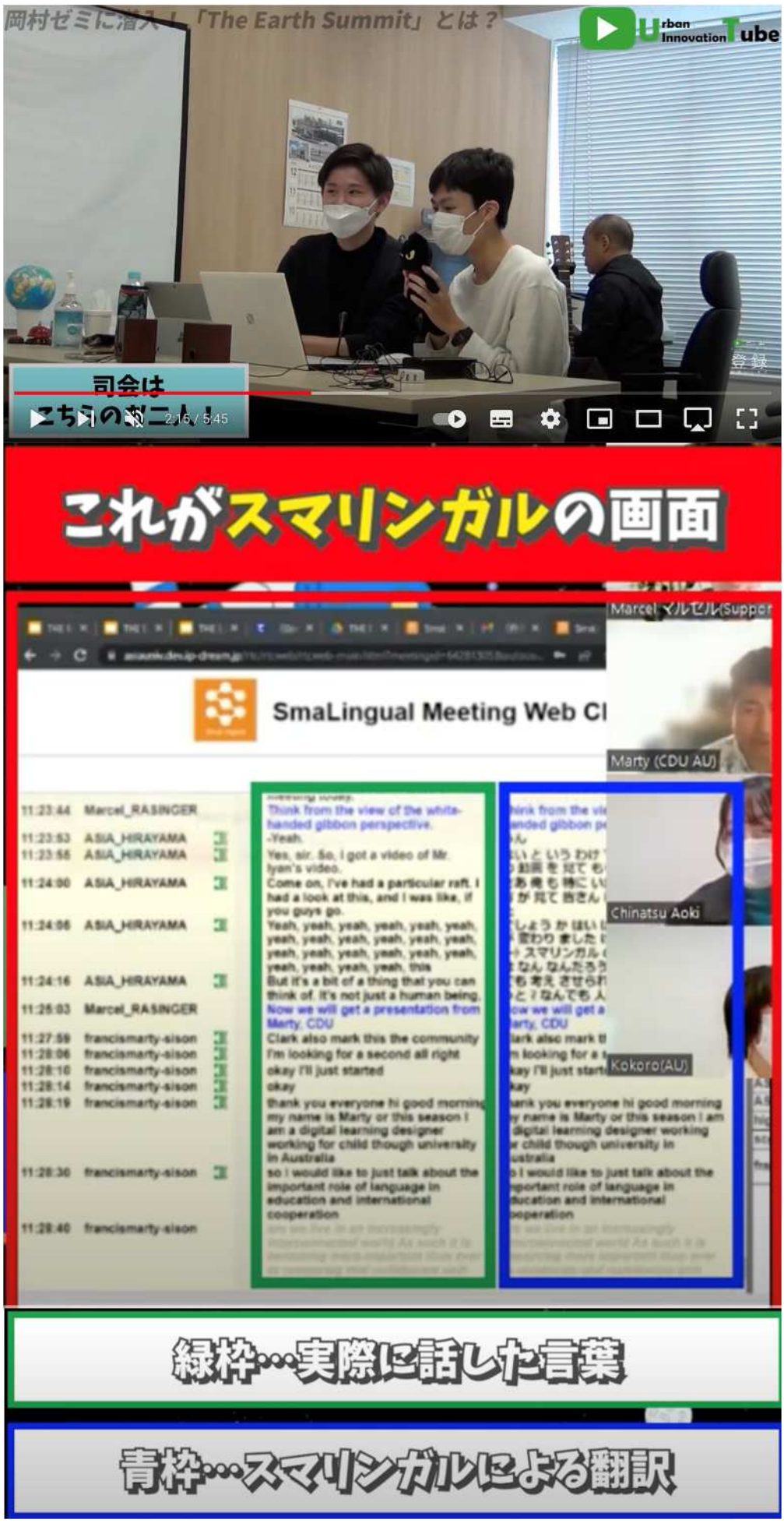


（iii）国際交流を AI 自動通訳システムをつかって実施する

シナリオ

参加者ワークシート




岡村ゼミに潜入！「The Earth Summit」とは？
Urban Innovation Tube
司会は
こちらの方二人！
2:16 / 5:45
これがスマリンガルの画面
SmaLingual Meeting Web Cl
Marcel マルセル(Suppor
Marty (CDU AU)
Chinatsu Aoki
Kokoro(AU)
11:23:44 Marcel_RASINGER
11:23:53 ASIA_HIRAYAMA
11:23:55 ASIA_HIRAYAMA
11:24:00 ASIA_HIRAYAMA
11:24:06 ASIA_HIRAYAMA
11:24:16 ASIA_HIRAYAMA
11:25:03 Marcel_RASINGER
11:27:59 francismarty-sison
11:28:06 francismarty-sison
11:28:10 francismarty-sison
11:28:14 francismarty-sison
11:28:19 francismarty-sison
11:28:30 francismarty-sison
11:28:40 francismarty-sison
Think from the view of the white-handed gibbon perspective.
-Yeah.
Yes, sir. So, i got a video of Mr. Iyan's video.
Come on, I've had a particular raft. I had a look at this, and I was like, if you guys go.
Yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, this
But it's a bit of a thing that you can think of. It's not just a human being.
Now we will get a presentation from Marty, CDU
Clark also mark this the community
I'm looking for a second all right
okay I'll just started
okay
thank you everyone hi good morning my name is Marty or this season I am a digital learning designer working for child though university in Australia
so I would like to just talk about the important role of language in education and international cooperation
緑枠…実際に話した言葉
青枠…スマリンガルによる翻訳

（亜細亜大学プロジェクトリーダーからの実施報告書）

令和04年11月29日

株式会社ヌールエ
筒井一郎様

亜細亜大学　都市創造学部
地球会議プロジェクト　平山璃恩
[redacted]

11月26日実施　地球会議#2　実施ご報告

貴殿におかれましては、ますますご健勝のことお慶び申し上げます。ご多用の中、「地球会議(THE EARTH SUMMIT)」にご協力頂き、まことにありがとうございました。 多くの方にご参加頂き、有意義な「地球会議(THE EARTH SUMMIT)」を開催することができました。これも貴殿のご支援とご愛顧によるものと、心から感謝いたしております。

本資料にて、当会議の実施報告をさせていただきます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

敬具

記

1. 日　　時　　令和04年11月26日（土）10時30分～15時00分
　　別日程にて、第１回目の交流会は実施
2. 場　　所　　亜細亜大学　1号館13階
　　オーストラリア(現地)
3. 会議内容　　コンセプト:「私たちの描く2050年の未来」
　　① Animal SDGsで考える新しい価値観と考え方(イアンさんご協力)
　　② 自分の周りや世界の課題
　　③ わたしたち「人間」には何が出来るか
　　④ わたしたちの描く2050年の未来
　　※詳細は次項にて記載させて頂いております。
4. 対　　象　　オーストラリア大学生、亜細亜大学生などの学生10名程度

5. 当日の進行・内容について

10:30　開会　(システムチェック含める)

10:45　司会挨拶

10:50　本日の会議内容の紹介

11:00　通訳システム（スマリンガル）のご紹介

11:20　基調講演I（筒井様　・　Marty様）

12:00　Lunch Time(準備)

12:15　Lunch Time*

12:45　《Session1》-Animal SDGsで考える新しい価値観と考え方

13:45　《Session2》-自分の周りや世界の課題(セルフ・グループワーク*)

14:00　Break Time

14:15　《Session3》-課題や問題の共有と私たち人間に出来ること

(グループワーク*)

14:35　発表

14:50　閉会宣言等

15:00　閉会

※当初のタイムテーブルを変更して運営いたしました。

6. 役割

ディレクター：平山

総 合 司 会：森本・内田

進　行　役：尾崎・青木・小林

ヘ　ル　プ：大木・隈河

技　　術：東方

総 合 管 理：御園

アンバサダー：内田

アドバイザリー：マルセル・ラージンガー　様

筒井一郎（イアン）　　様　　順不同

7. 使用コンテンツ

1. 事前資料

(ア) 日本語版

https://drive.google.com/file/d/1mi7bSlpg_9MwzF_YfBQ5_48-zoCxkdl3/view?usp=sharing

(イ) 英語版

https://drive.google.com/file/d/1klS6NIltDl-_EvdB9BHc8hMGbla22Txb/view?usp=share_link

2. ワークシート

(ア) 日英版

https://docs.google.com/presentation/d/1KMLgOSl9zGguCwdgcJbYDOKI5OOOKzGJl4xKGragN9Q/edit?usp=share_link

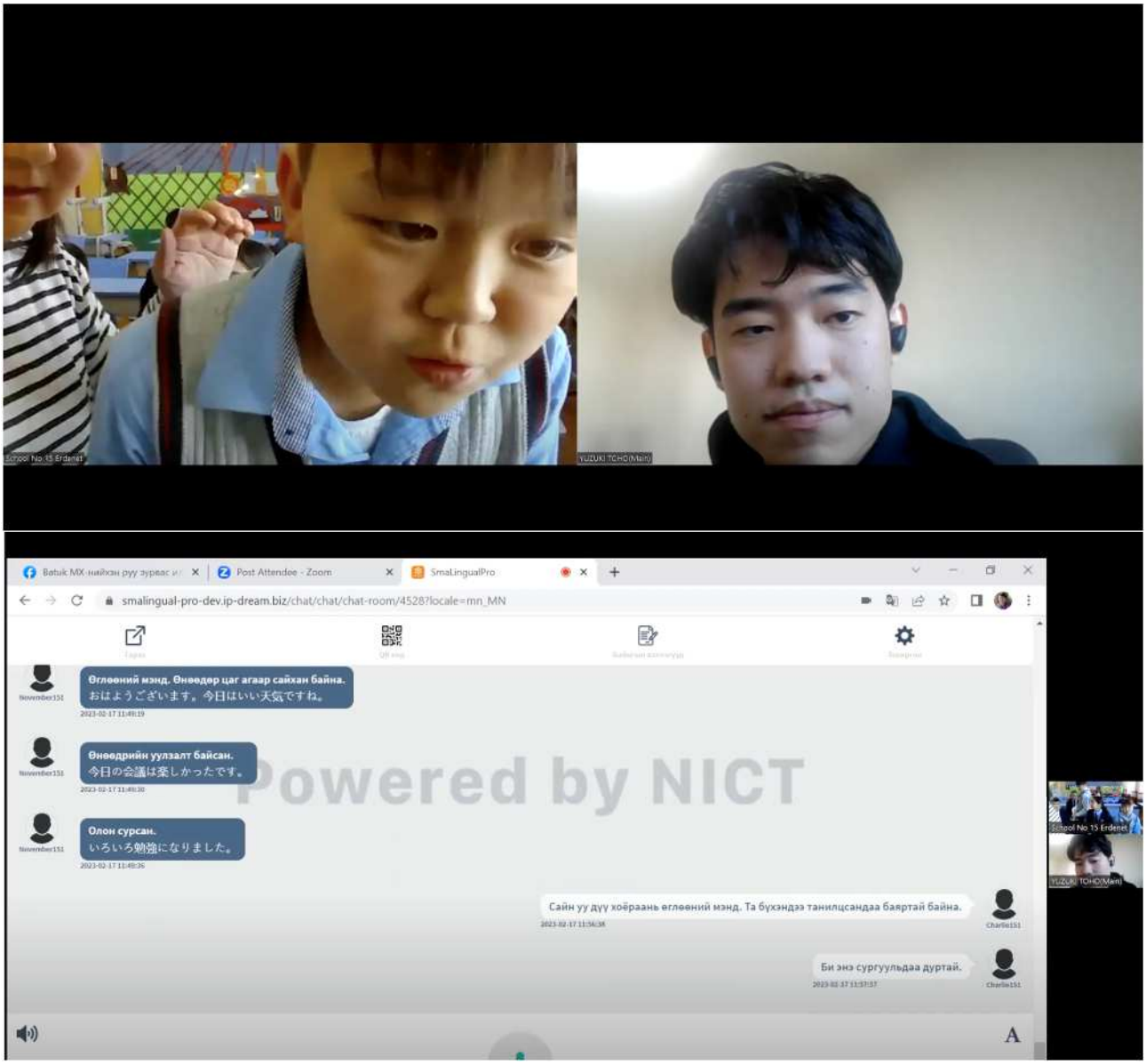
③1 月～２月：「地球サミット」の検証と「子ども地球会議」での実証実験
（ｉ）「地球サミット」の検証（亜細亜大　岡村ゼミ）
（ii）子ども SDGs 実行委員会、OISCA の担当者と計画づくり
（iii）インドネシア x 日本（高校生）の地球会議での検証
（iv）モンゴル x 日本（小学生）の地球会議での検証

（ｉ）「地球サミット」の検証（亜細亜大　岡村ゼミ）
AI 自動通訳システム「スマリンガル」を活用した会議進行に課題がある
・ソフトウエアの性能・機能上の問題
・マイク（on off）等の会議進行上の運用面の問題
上記を各担当者がアップデートして再チャレンジすることが決まる

（ii）子ども SDGs 実行委員会、OISCA の担当者と計画づくり
２月に実施が計画されている、日本とインドネシアの高校生による会議、
日本とモンゴルの小・中学生による会議の中で実証実験の機会を計画する
・交流会議をプロデュースする子ども SDGs 実行委員会（柿沼）
・OISCA インドネシア・モンゴルの現地コーディネーターとの調整役（諸江）

（iii）インドネシア（高校生） x 日本（高校生）の地球会議（ZOOM）での検証

（ⅳ）モンゴル（小・中学生） x 日本（小学生）の地球会議（ZOOM）での検証



亜細亜大学の学生とモンゴルの子どもたちと交流（AI 自動通訳システムの画面）

［７］実験結果と考察

【実証実験に当たっての２つの仮説】
（若者たちの成長）
若者たちは、Animal SDGs をプロデュースすることで「自己肯定感」が高くなる

（プロジェクトの進化）
１：若者たちが、自らの関心をもとに「Animal SDGs」視点の国際会議を実現する
２：世界の子どもたち同士が、AI 自動通訳を使って交流できる
３：国際交流版「Animal SDGs」対話の場づくりのパッケージが完成する

［結果１］若者たちは自らチャレンジし、成長した
［結果２］若者たちが自分ごとをテーマに「Animal SDGs」視点の国際会議を実現した

「5 月の『Animal SDGs』講義後、ゼミ生同士で話し合い、決まったテーマが『自分の考えを発言できるようになりたい』です」と連絡があった。「SDGs の～（○番）をテーマに若者会議をしたい」と提案があるものと想定していたので、予想外であった。

「自分の考えをもちたいの？」と質問すると「はい！」というので、宇部市で実施しているインストラクター養成講座の受講を勧めた。9 月に機会をつくり、ゼミ生を代表して２名が参加した。「サステナブルデザイン」「動物かんきょう会議ショートバージョン体験」「子どもの力を引き出すには」「インストラクターの心得」など１泊２日。多様な大人たちとの対話の場による研修の終盤、若者から「私たちの大学は中間的なポジションにある。私たちのような学生が自ら考えをもち、行動できるようになると、社会は大きく動くと思う。研修に参加して、自分でもデキルという自信がついた。ゼミに持ち帰って地球会議がんばります」と発言がある。

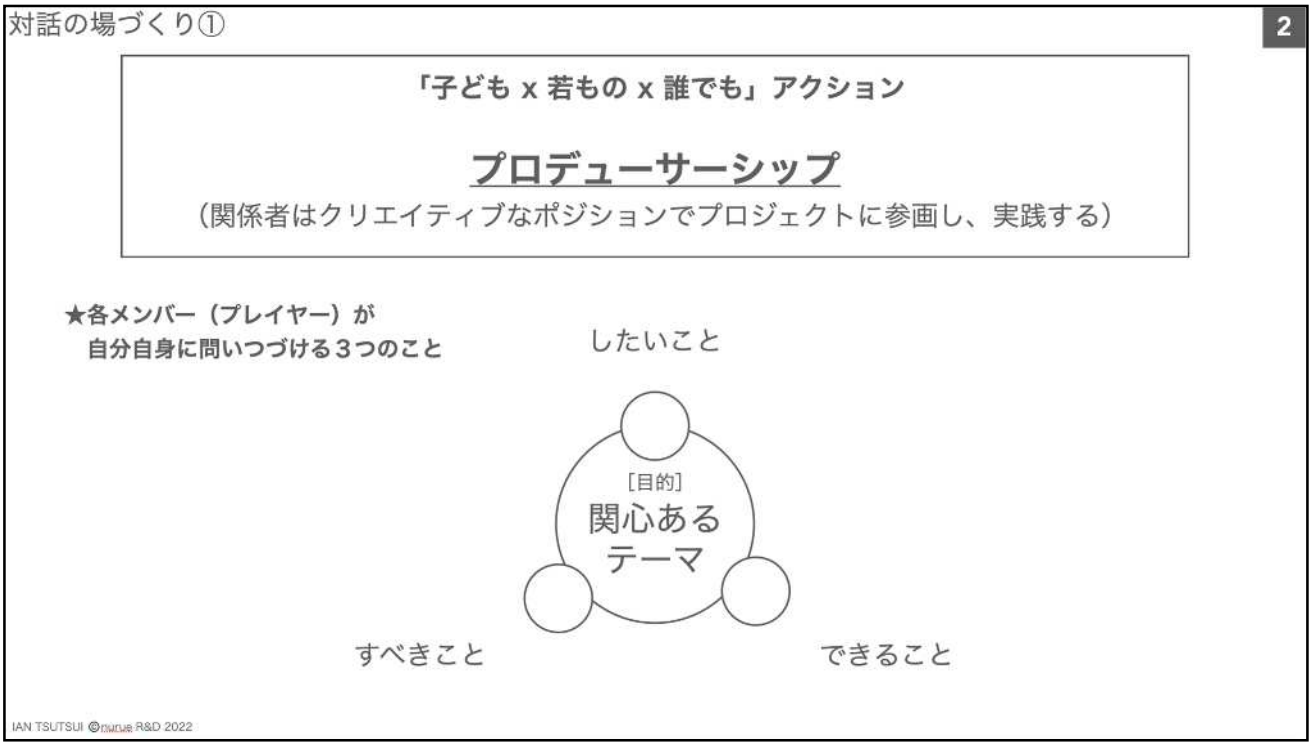
そして、11 月の地球会議では若者たちがそれぞれ役割を持ち、力を結集して計画を実現した。

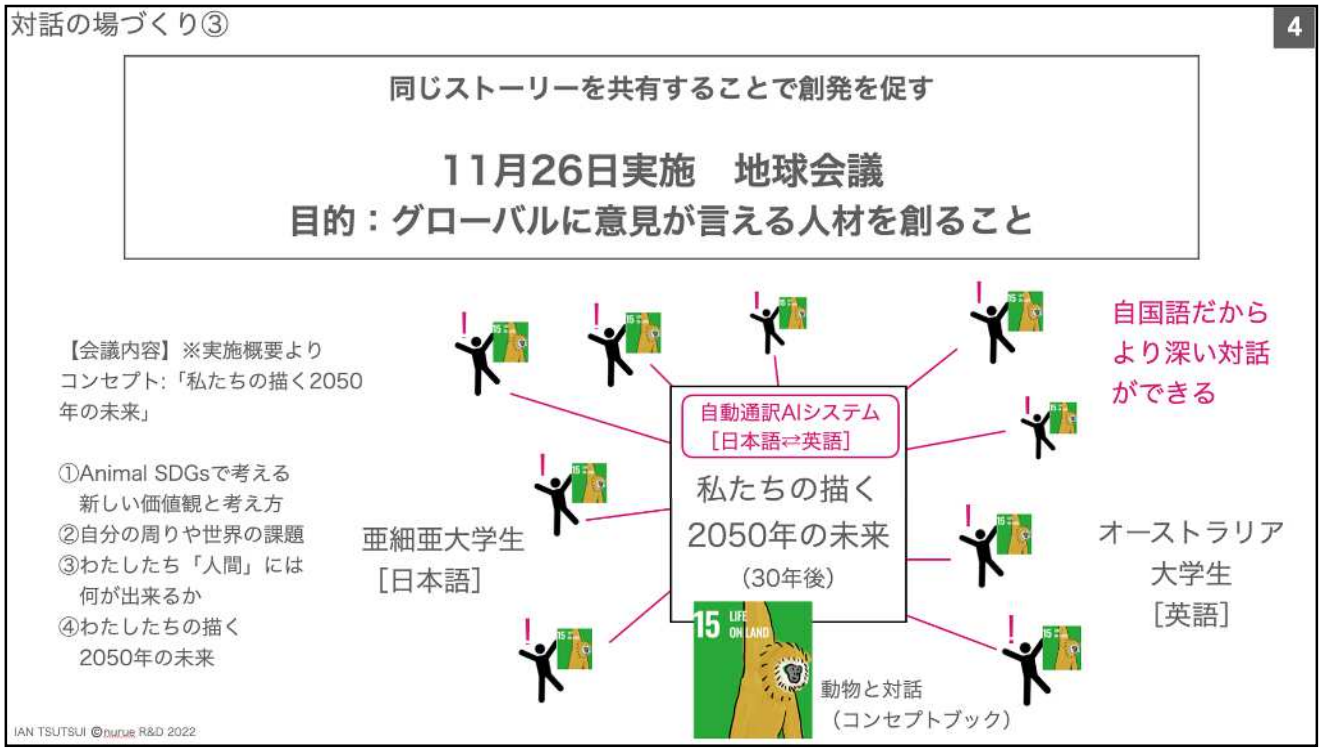
「対話の場」　ではなく　「対話の場づくり」

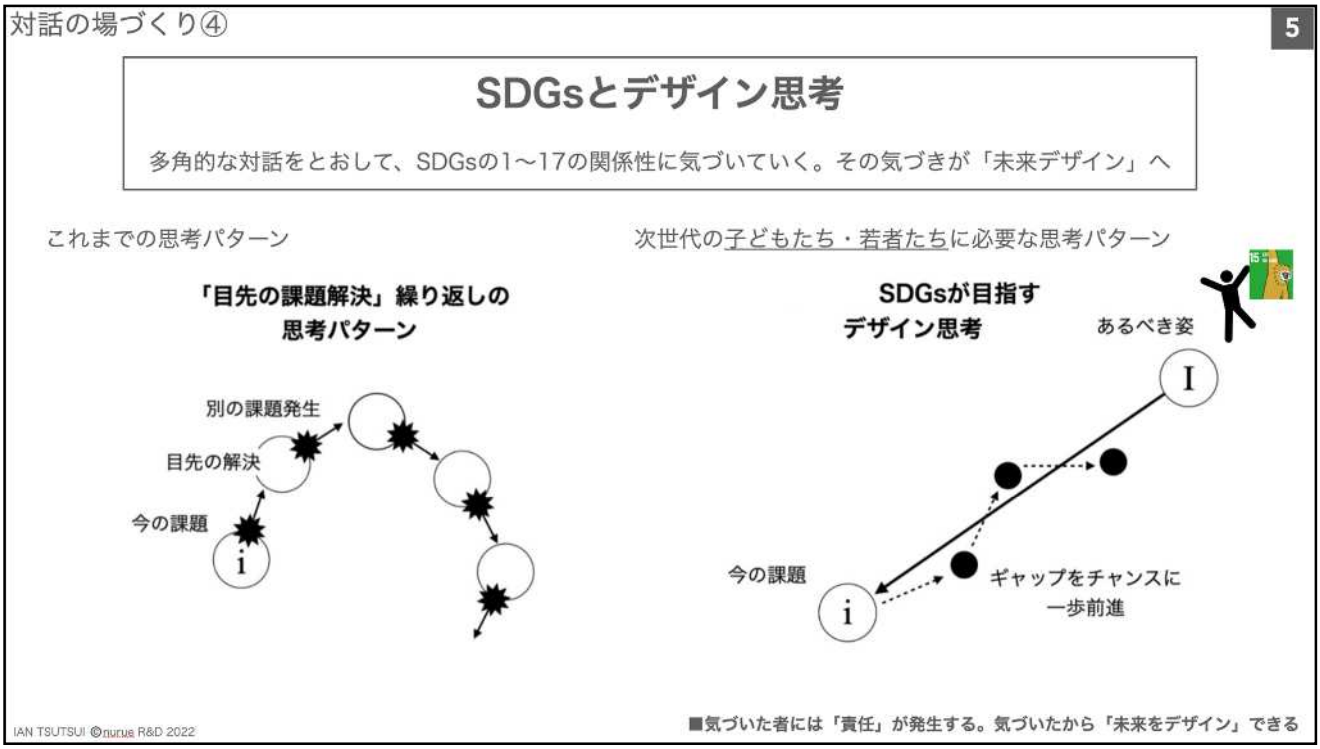
①私は「Animal SDGs」というボール（アイディア）を若者たちに投げる
②若者たちはそれを受け止め、自分たちの考えで行動計画を立てる
③具体的アクション「地球会議」というボール（アイディア）を私に投げかえす
この一連の流れが「対話の場づくり」

誰かから与えられた「場」ではなく、「場」そのものを創出することに成長の機会があると私は考えている。創出するプロセスは、プロデューサーとしての働きに相当し、全方位的な能力を試されるからだ。リクルート創業者の江副浩正氏の「自ら機会を創り出し、機会によって自らを変えよ」に通づる考え方でもある。

（中間報告の資料より「対話の場づくり」の具体的手法）




対話の場づくり③
4
同じストーリーを共有することで創発を促す
11月26日実施　地球会議
目的：グローバルに意見が言える人材を創ること
【会議内容】※実施概要より
コンセプト:「私たちの描く2050年の未来」
①Animal SDGsで考える新しい価値観と考え方
②自分の周りや世界の課題
③わたしたち「人間」には何が出来るか
④わたしたちの描く2050年の未来
自動通訳AIシステム
[日本語⇄英語]
私たちの描く
2050年の未来
(30年後)
亜細亜大学生
[日本語]
オーストラリア
大学生
[英語]
自国語だから
より深い対話
ができる
動物と対話
(コンセプトブック)
IAN TSUTSUI ©nurue R&D 2022


対話の場づくり④
5
SDGsとデザイン思考
多角的な対話をとおして、SDGsの1～17の関係性に気づいていく。その気づきが「未来デザイン」へ
これまでの思考パターン
「目先の課題解決」繰り返しの
思考パターン
別の課題発生
目先の解決
今の課題
i
次世代の子どもたち・若者たちに必要な思考パターン
SDGsが目指す
デザイン思考
あるべき姿
I
今の課題
i
ギャップをチャンスに
一歩前進
■気づいた者には「責任」が発生する。気づいたから「未来をデザイン」できる
IAN TSUTSUI ©nurue R&D 2022

［結果３］AI 自動通訳システムをつかっての国際交流は「発展途上」にある

本事業では実証実験を行う機会が３回あった。

（１）亜細亜大、オーストラリアの若者同士による「地球会議」
前述の通り、
・ソフトウエアの性能・機能上の問題
・マイク（on off）等の会議進行上の運用面の問題

（２）インドネシア（高校生） x 日本（高校生）の地球会議
日本の高校生から、英語で交流したいと希望があり
インドネシア側の若者にも英語でスピーチしてもらう。
・日本の高校生特有の恥ずかしい気持ちが出てしまい、英語の発音がクッキリせず翻訳できなかった。
・インドネシアサイドも同様、母国語ではないイントネーションに翻訳が上手に反応できない部分もあり、性能上の課題となる。
・インドネシアサイドのスタッフに AI 自動通訳システムの操作を依存することは運営上の無理がある。
・ZOOM 用機材（PC）＋AI 自動通訳用機材（PC）＋プロジェクターなど
現時点では日本サイドと同等のシステムの構成ができない。

（３）モンゴル（中学生） x 日本（小学生）の地球会議
・モンゴルサイドのスタッフに AI 自動通訳システムの操作を依存することは運営上の無理がある。
・モンゴルサイドのスタッフ（通訳者）の声と、AI 自動通訳システムによる自動音声が重なることがあり、聞き取ることに難がある。
・モンゴルサイドのスタッフ（通訳者）が、機会操作の役割と、会議進行するうえでの役割の２つを担わざるを得ず、操作が煩雑になり、会議進行の妨げになる。
・モンゴルサイドのスタッフ（通訳者）は途中から、AI 自動通訳システムの利用は断念し、会議終了後に、亜細亜大担当者との１対１での検証試験を行った。

以上から、現段階では、AI 自動通訳システムを操作できる専任オペレーターが現地会場に必要ということがわかった。

現在　：現地スタッフは　①会議進行（MC）　②通訳　の二役
目標　：現地スタッフは　①会議進行（MC）　②AI 自動通訳（無人）

を実現するためには、相手国スタッフとの検証実験を重ねる必要がある。

［結果４］国際交流版「Animal SDGs」対話の場づくりパッケージの研究はつづく

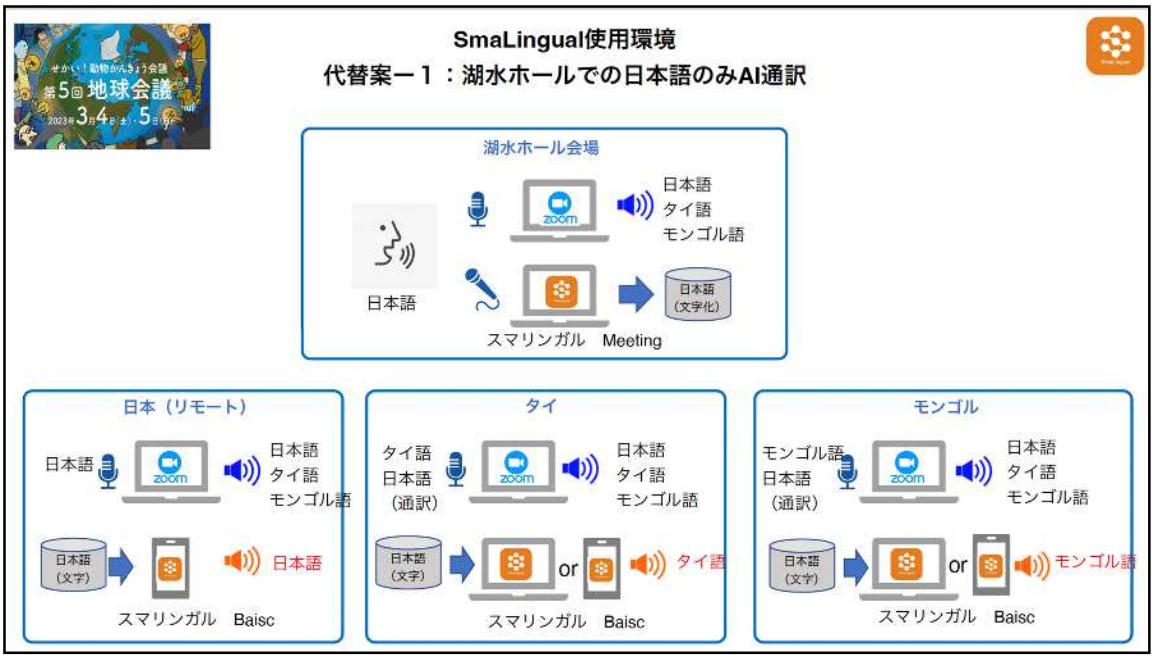
今回の検証実験の裏テーマは、日本そして世界の子どもたち（中・高校生）に、自分より３～５年先の大学生（先輩）がチャレンジしている「未来デザイン」づくりに立ち会うこと。新企画が創り上げられていくプロセスに子どもたちが立ち会うことは、対話の場づくりのコンテンツとして意義があることを関係者と共有できた。

タイ・モンゴル・日本の国際交流コーディネーターとは、検証実験を継続することで了解がとれ、AI 自動通訳システムを活用した研究は継続できることになった。

［８］今後の計画

（１）３月５日に開催される、日本・タイ・モンゴル３カ国「地球会議」

実行メンバーと相談の上、再度検証実験を行う。今回は、双方向ではなく一方向で「日本語→タイ語・モンゴル語　同時 AI 通訳の機能を検証する」仕様とし、日本語が確実に現地語に通訳されることを子どもたちが体験できる計画。日本会場（宇部）に、AI 自動通訳システムの亜細亜大担当者を派遣し、専任オペレーター役として地球会議の運営に参加する。



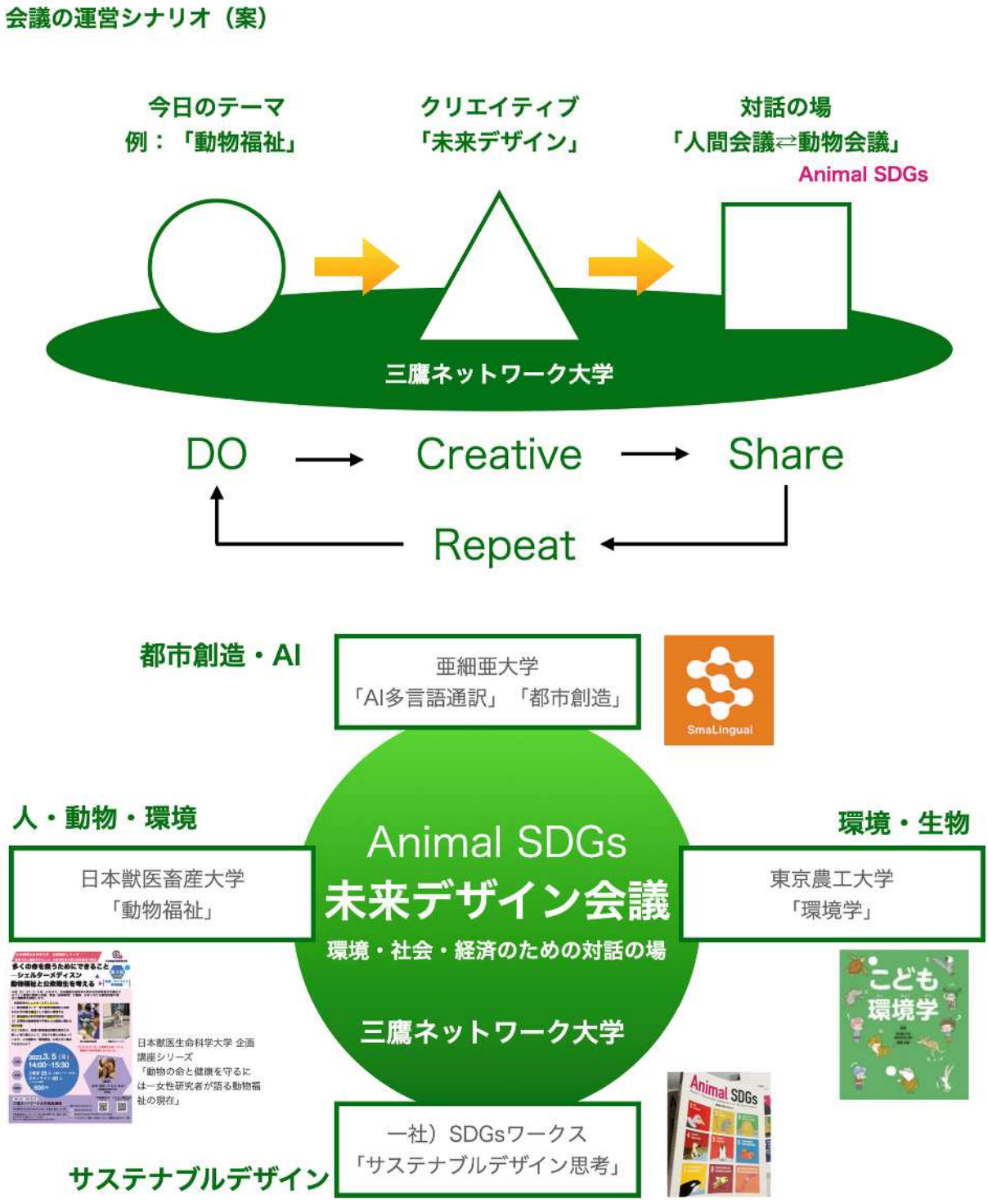
（２）亜細亜大による AI 自動通訳システム活用の継続研究

本研究活動をとおして信頼関係を構築した関係各位とともに、それぞれのリソースを出し合うことで WinWinWin となる「未来デザイン」を実現していくことを目指す。

［９］ご提案
三鷹ネットワーク大学のリソースを活かした新コンテンツ
「**Animal SDGs**　未来デザイン会議」

亜細亜大学、日本獣医畜産大学、東京農工大学の各専門領域（知財）と連携し、高い視点で未来をデザインしたい若者・大人のための「対話型」実践講座である。会議の運営には地域大学の若者たちが関与し、会議は AI 多言語通訳システムにより国内外の参加者と議論できる。各大学は、テーマ講義を提供し年間カリキュラム（全 10 講義程度）とする。

上記、提案まで含めて、本研究の報告書とします。ありがとうございました。



［10］参考資料：テーマ講義例（日本獣医畜産大学）

日本獣医生命科学大学　企画講座シリーズ
「動物の命と健康を守るには－女性研究者が語る動物福祉の現在」

日本獣医生命科学大学

多くの命を救うためにできること
―シェルターメディスン
動物福祉と公衆衛生を考える

第３回
日時変更

教室・オンライン
同時開催

４回（11・12・2・3月）に分けて、日本獣医生命科学大学の女性研究者が犬猫などのペット動物の健康と保護、家畜（産業動物）の健康、日本における動物保護の現況と課題等を解説します。

米国発祥のシェルターメディスンは、
1）動物愛護センター等の動物保護施設に収容された犬や猫を集団として適正に管理する
2）動物虐待の科学的評価や獣医学的対応
3）災害時の動物管理や平時からの動物に関わる防災対策
の３つを柱に、地域の動物福祉問題を解決する新しい取り組みとして、日本でも導入が始まっています。この最新の「動物福祉」の考え方に触れてみませんか？

猫の保護収容風景

保護犬のリハビリ

※1月15日（日）に実施を予定していた講座の日時が変更になりました。

日時　2023.3.5（日）※
14:00～15:30

定員　①教室 25人（三鷹ネットワーク大学）
②オンライン 40人
＊いずれも先着制

受講料　500円

《講師》
田中 亜紀（たなか あき）
日本獣医生命科学大学
准教授

お申し込み・お問い合わせ
三鷹ネットワーク大学推進機構
申込期間▶2月21日(火)9:30～3月4日(土)21:00

①教室参加はホームページ、または申込書をFAX、郵送、窓口のいずれかで三鷹ネットワーク大学へ。
②オンライン参加はPeatixからお申し込みください。

電話 0422-40-0313
FAX 0422-40-0314
URL https://www.mitaka-univ.org/
郵送先 〒181-0013 三鷹市下連雀 3-24-3 三鷹駅前協同ビル３階

①教室受講の申込はこちらから
②オンライン受講の申込はこちらから（Peatix）